

〈資料〉

2016年度「学びのパネル」講演録

石本雄真・小谷健一

はじめに

学校は、教科指導だけを行う場ではなく、生徒指導も重要な役割となる。生徒指導においては、まず学級経営という形での環境整備が重要である。学級経営が良好であることは、教科指導を行う上でも必須の条件となる。また、さまざまな問題が学校において表れる昨今においては、生徒指導を学校だけで担うことは困難であり、また望ましいともいえない。このため、近年ではさまざまな関係機関との連携の必要性が指摘されている。このような状況を踏まえ、今年度は、「学びのパネル」(パネル・ディスカッション)として、「学級経営」、「関係機関との連携」という2つのテーマでそれぞれ3名のパネラーに登壇いただいた。以下では、「学びのパネル」(パネル・ディスカッション)の様子を逐語録として紹介する。

なお、個人情報に関する内容については削除・改変を行っている。また、講演は写真を含めたパワーポイント資料をプロジェクターで投影して行われており、写真やスライドを指示しながらの場面が含まれるが、文中には特にその箇所を明示していない。

テーマ1 「学級運営」

(小谷)これから「学級経営」についてのパネル・ディスカッションを始めます。今日のパネリストの先生をご紹介します。まず、左側が鳥取市立散岐小学校教諭の瀧井 夏先生です。次に、その隣が八頭町立郡家西小学校教諭の前田 徹先生です。その右側が鳥取市立久松小学校教諭の西田規子先生です。

これから3人の先生方から「学級経営」について、日頃の実践を基にお話していただきます。

(1) パネリスト講演:

瀧井 夏 鳥取市立散岐小学校教諭

(瀧井) 皆さんこんにちは。

(会場) こんにちは。

(瀧井) 鳥取市立散岐小学校から参りました、瀧井 夏と申します。よろしくお願い致します。このお話をいただいたときに、私、お二人とも知り合いで、特に前田先生は、同じ学校で同じ年に採用になった方なので、すごく心強く感じています。私は真面目な話をしますけど、多分、お二人が程よくほぐしてくださると思うので、まずは私の話を聞いてください。

私の勤める散岐小学校は、鳥取市の南部にあります。鳥取道を河原道の駅から大阪方面に行くと、右側に三角屋根の学校が見えてきます。近くには地元の大豆を使ったおいし

い豆腐屋さんもありますので、もし良かったら、ぜひ散岐小学校にも来ていただきたいと思います。ちなみに、私の知る限り、コンビニも信号機もありません。のどかな田園風景が広がっているところで、児童数は73人、私が担任するのは5年生の13人です。

私の経歴を少し紹介します。

まず、講師で4年間勤めました。初任校でも4年間、2校目で8年間、うち1年間は内地留学をさせていただきました。現在、採用になってから3校目で3年目ということです。最初に講師で学校現場に出たのですが、当時は、なかなか講師の口すらないような採用がとても厳しい時代でしたので、4月に大学を卒業して鳥取に帰ってきたのですが、無職で行く当てもないという状況でした。そんな時に、ようやく5月の終わりから、産休・育休代員で勤めることになりました。

1年目のことについてお話しします。私がまず教室に入ると、子ども達が目をキラキラ輝かせて、私のことを待っていました。話しかけてくるし、抱きついてくるし、一緒に遊ぼうと声をかけてくれるし、教諭として採用になってないのですけれども、先生と呼ばれることが嬉しくて、いよいよこの仕事に就くのかなという期待が膨らんできました。しかし、初日に起こったことは鮮明に覚えていて、子ども達が、次々と保健室に行きたいと言うのです。2年生の子ども達が。たぶん私がしどろもどろで不安な様子だったので、いたたまれなくなって、教室を出たかったのだと思います。毎日の授業も大変でした。皆さんはどうか分からないのですが、私は小学校課程の卒業ではないので、小学校の教

壇に立ったという経験が教育実習の 2 週間しかありませんでした。ですので、毎日指導書と教科書を持って帰って、今では考えられないのですが、半分泣きながら、また、ご飯を食べながら、明日は何をするか考えるというような日々を送っていました。それから、子ども達がトラブルを起こすのですが、その対応も自分一人ではできなくて、主任の先生と一緒に入ってもらって指導したというようなこともありました。学年が 2 クラスでしたので、例えば、生活科とか体育とかは、同じ時間に一緒にします。主任の先生が 1 回目にやってくださったことを、次回は私が真似して同じようにするというようなことをさせていただきました。それから、些細なことですけど、皆さんは連絡帳を書きましたよね。連絡帳に何を書かせるのかも分からなくて、隣のクラスを覗いては書いてあることをそのまま写すというような感じでした。1 年目に言われたのは、「若さは武器だで」と言うことでした。「若い時は何も言わなくても子どもが寄ってくるけん」と言われたのも覚えています。それから、やはり、教師が不安になると子ども達も不安になるのだなということも、よく分かりました。また、先生であるからには、授業作りというのも大事だと思いました。それから、当時は全く気がつかなかったのですが、改めて考えてみると、1 年目に、保護者さんからクレームらしいクレームというのをいただかなかったなと思います。もちろん要望とかそういうものはあったのですが、私の耳には届かなかったです。もしかしたら、校長先生を始めとして、学校が守ってくれていたのかもしれないし、自分が一生懸命やっていたので、保護者が暖かく見守ってくださっていたのかもしれないと、今は思います。

先日、大学院に通っている知り合いの先生から、論文を書くにあたって「先生の教員人生をグラフにするとどうなるか」と言われました。そこで、してみました。赤はやる気です。2 年目でがくんと落ちているのですが、2 年目は半年間仕事がありませんでした。いわゆるフリーターで、いくつかのアルバイトを掛け持ちしながら、講師の声がかかるのをひたすら待っていました。将来に対する希望も持てないし、なれるかどうか分からない仕事にしがみ付いていいのかという不安もありました。声がかかり、ここで上がっているんですけど、講師とはいえ、この 4 年間というのは、毎回新鮮でした。色々な先生方と出会えるし、子ども達にも出会えるし、それから、学校ごとに文化が違うのですね。一つのことをするのに、やり方が全然違うので、それを知る楽しさもあって、本当に充実した 4 年間でした。また、その時に知り合った人たちが、今の私にとって、とても大切な存在になっています。ここで上がっているのですが、これは、まさにやっと採用になったという夢の 4 年間で、前田先生と一緒に働いた時でもあります。とにかく何でもかんでもやりましますみたいな勢いで、楽しい、やる気のある 4 年間だったなと思います。正式に採用されて、仕事の重みが違うということや、初めて高学年を担当させていただいて、学校が子ども達と動いているのかということを実感した時もありました。ここで下がるんですけど、異動します。採用後初め

での異動で、講師の時の 4 年間は、毎年異動するのがあんなに楽しかったのに、4 年間も同じ学校に勤めてしまうと、違う学校に行ったら、慣れもしないし、子ども達との関係もじっくりこなくて、すごくしんどかったのを覚えています。ここで上がっているのは、内地留学をさせていただいたからです。「このままではいけん」と思ったので、ちょっと大学に出て、自分が専門的に深めたいなと思うことを勉強させていただきました。大学生の時は、あまり勉強しなかったのですが、現場に出てから大学に戻ると、あは、素晴らしい授業だったのだなというようなことを感じました。そして、ここで下がっているのは、異動したからです。やはり、長く勤めてから異動すると辛かったです。

もう一つは技術面なのです。黄色い線は技術面を表しています。徐々に上がっているのですが、目盛りが無いのは、私の主観で、そういう感じ、なんとなくそういうイメージですということです。最初の 10 年間は、毎年新しい知識とか技術を吸収して、仕事の能率が上がっているという感じがしていました。実際にはどうか分からないですけど自分で勝手にそう感じていました。でも、ダイエットじゃないのですけど、停滞期を迎えるのです。この学校は大きな研究会を受けていたのですが、初めの 10 年ほどは伸びを感じなくなっていました。それで内地留学をすることにしました。その後は、採用 10 年目で学年主任を初めて任されました。その次の年には研究主任にもなって、仕事が責任あるものになっていきました。ずっと上がっていけばいいのですが、頭打ちになるかも知れないし、ちょっとそこは分からないところです。学生の皆さんは、若くして採用にされると、もしかしたら 20 代で学年主任を任せられるということも可能性があるのではないかなと思います。

前置きが長くなりましたけど、学級経営で大切にしていることを 6 つ挙げてみました。6 つに絞るのが難しくて、すごく沢山あったのですが、こんな感じかなと 6 つにしてみました。私が、これらすべてができてという訳ではないので、心がけているということで聞いてください。

まず一つ目は、信頼されることが何より大事だと思っています。その為に日々することは何かと考えて、まず、時間を守るということあげたのですが、これは大事な順番に並んでいるわけではないので、そのように聞いてください。例えば休憩前とか給食前とか、子ども達はすごく時間を気にしています。授業を延ばすことをすごく嫌がります。ですから、時間どおり始めて、時間どおり終わるということを心がけています。それから、当たり前ですけど、子ども達との約束も守りますし、守れない場合はそれなりの説明をちゃんとします。次に、聞くということです。喧嘩をした子ども達がいたとして、まずは、その子たちの話をしっかり聞いてやると、そこでかなりクールダウンして、お互いが見えるようになってきます。カーッとなっている保護者さんと向き合うときも、まずはお話をしっかりと聞いた上で、共感的にお話をするということがスタートかなと思います。それから、私のことではなかったのですが、子どもに、「あの先生は叱らんけ嫌だ」と言われたことがあります。つまり、子

ども達はきちんと叱ってほしい、叱るべき時は叱ってほしい、褒める時は褒めてほしいと思っています、ただ優しい先生だけを求めているのではないのだなということをよく考えます。それから、迅速・誠実に対応するということです。トラブルがあった時には、校長先生とくに報告・連絡・相談をして、すぐに対応することは大事だと思います。私もよく子どもに謝るのですが、教師も人間ですので、もちろん失敗をします。失敗したら謝ればよいですし、子ども達は、私が失敗した経験話をするととても興味深く聞いています。

次に、授業作りは子ども達とということです。一つ目は、ノートは子ども達と作ります。これは、今年の私の学級の算数ノートです。例えば日付とページを書くとか、めあてを書くとか、図や表も描くとか、振り返りするとか、当たり前のことなんですけど、どの教科でも、これらを年度初めに徹底しておくいいと思います。良いノート10か条を挙げています。例えば友達のノートを掲示したり、私はじろじろタイムと呼んでるのですが、子ども達みんなが自分のノートを机上に広げておいて、お互いに見合っ、良いところを付箋紙に書いて貼ったりとか、そんなこともしています。それからですね、聞くということがやっぱり大事だと思います。子ども一人が学習中に発言する時間は本当にわずかなですよ。よほど聞いている時間の方が長いので、お互いに学び合ったり、深め合ったりするためには、聞き手を育てることがすごく大事だと思います。それからマンネリ化を防ぐために、いつも同じパターンで勉強していると、私自身も退屈になってしまうので、新しい方法にもチャレンジしていきたいなと思います。先日、知識構成型ジグソー法という新しい学習方法に取り組んでみたんですけど、上手はいきませんでした。しかし、子ども達は楽しそうにしました。また、笑顔とユーモアは潤滑油って書いたのですが、冗談の一つでも言うとか、突っ込むとか突っ込まれるとかそういうこともすごく大事だと思います。それから、教室についてですが、私は、放課後に子ども達が帰った後に、教室を整頓してきれいにしておいて、あの瞬間が結構好きなんですけど、次の日、子どもたちが来た時に、机がガタガタだったりとか、ごみが落ちていたりとかいうのは、やっぱり気持ちが悪くないと思います。

次に、めあてやルールをつくることを書きました。このことに、若い時に一番苦労したからなんですけど、なぜ苦労したか考えた時に、年度の途中に、思い付きでルールを決めたり、変更したりということをやっていたのが原因じゃないかなと思います。緊張感のある4月とか5月に、そういうことをきちんとしておくことは、その後、お互いが楽だと思うので、大事だと思います。また、学級目標を合言葉にすることです。これは、私のクラスの学級だよりです。タイトルは「チャレンジャー」です。これが、学級目標というか学年目標になっています。何でもチャレンジしようということで、4月に子ども達と、これを合言葉に1年間やろうということをお話ししました。4月から取り組んできたことを教室の中に掲示しています。ちなみに、掲示物はよく貼っぱなしになるのですが、私は1か月ぐらいが限度

だと思って、フレッシュなものに変えていくようにしています。習字とかも貼っぱなしだと、習字が不得意な子はつらいと思うこともあります。めあてやルールを、なぜ守らせられなかったかという、こちらが一方向的に押し付けている場合があるのではないかなと思います。ですから、皆で話し合っ決めて決めたことは、安易に変更したり、特別な日を作ったりしないということに心がけています。例えば宿題です。私は、何かの褒美で宿題をやめるとか、何かの罰で増やすということは基本的にはしません。粛々とこの量をしますよということをお話ししてやらせるようにしています。最初はいろいろ言ってくるのですが、そう簡単に譲りませんから、そのうち、この先生は、この点については聞かないなと思ったら諦めて言わなくなります。これは筆箱の写真です。こういう物を写真で視覚的に示したり、学年だよりに掲載したりします。保護者にも知ってもらっ、協力していただけると実感しています。それから、言葉遣いは丁寧に書いています。心苦しいのですが、実は、私は教員なりたての頃、若い頃は荒々しい言葉を使っていたと思います。「もう一回言ってみろ」とか「なんだ」とみたいな言葉を結構使っていたんです。でも、最近は丁寧な言葉でどれだけ締められることができるかということをお自分でテーマにしています。子ども達にとって、私たち教員も大事な言語環境の一つなのだと意識しています。低学年の子が、よくため口で話しかけてくることもあるのですが、言い直させたり、こちらが丁寧に言ったりしていると、子ども達も丁寧に言うようになりますし、丁寧な言葉でも十分親しい関係を作ることができると思います。はじめは大事だと思います。それから自分の学校でよく言われてきたことで、たかが名札されど名札ということがあります。子ども達は安全上名札をつけて帰らないんですね。学校でつけて学校ではずして帰るということになっているのですが、その名札をなかなか全員がつけられない。全校でつけようと言っているのにそろわないんですね。たかが名札なんですけど、みんなでやろうと決めたことをきちんとするということは、とても大事だなと思います。

次に褒めるということなんですけど、なんでも褒めればよいというものではないと思っています。目指す姿に近づいた時とか、努力による変容が見られた時とか、前向きな気持ち表れている時とか、それが本当に頑張っているところなのか、その子がこだわっているのは何なのかというのを、なるべく探して褒めるようにしています。褒め方で効果的だなと思うものを自分で考えてみたのですが、私が子どもを直接褒めるのももちろんいいのですが、たとえば小谷先生があなたのことをこんなんと言っていたよとか、間接的に褒めるとすごく喜ぶます。それから時間差で褒める。「あ、そういうこの前の授業の時にだれだれさんがあんないい考えを出していたよね」とか言っ引っぱり出してくるとか、そういうのも喜ぶます。それから自分もそうでしたけど、名前を呼んで褒める。「だれだれさんあなたの」というような感じで褒めることですね。名前が覚えられない時は、さりげなく上靴とか名札をチラッと見て確認します。

名前を呼ぶと「どうしてぼくの名前知っているんですか」とか聞かれますが、その後も親しく話しかけて来てくれたりします。名前をきちんと呼ぶというのは大事です。

五つ目です。先輩に学ぶと書きました。これまでいろいろと偉そうに言ってきたんですけど、特に経験の浅い時は、一人で解決しようなんて思わない方がいいと思います。私も散々失敗をしてきました。ぜひ先輩の先生を頼って欲しいと思います。同学年の先生、話しかけやすい先生、年の近い先生など、とにかく分からないことがあったら聞いてください。聞かないまま進んでいると、子ども達も困るし、もちろん自分自身も困ります。それから、先生方の技術を盗むということもすごく大事だと思います。私は、今まで一緒に学年等を組んできた先生方が、長年かけて大事にしてこられた技術を惜しみなく教えてくださって、ものすごく感謝しています。待つばかりではいけないと思うので、自分から進んで学ぶという姿勢も大事だと思います。学校で意外とお宝だと思う物が落ちていたところを探したんですけど、プリンターとか印刷機の近くって、先生方が印刷した物とかの原稿とかが残っていたりするんですね。もちろん見たいいけない物もあるので、全部はいけないと思いますけど、「おっ、こんなことを書いてんさるんか」みたいなことが分かったりするので、ちらっと覗いてみるのもいいかなと思います。それから、他の先生の学級だよりとか学年だよりとかを読ませてもらうとかもできると思います。それから県によって違うと思いますが、日直で鍵を閉めて回る当番になる日があるのですが、その時には、堂々と他の先生の教室に入って、掲示物とか机の様子とかが見られるんですね。そういうのもチャンスだと思います。それから、学校には得意教科のある先生が必ずおられると思うので、その先生たちにお話を聞いたり、授業を見せてもらったりするのもよいと思います。

最後に、あまりこれにたより過ぎるといけないと思いますが、給食はバロメーターだなとも思っています。この写真は、実は今日の給食時間の写真です。欠席した子の魚を誰が食べるかというジャンケンをしているんですけど、こんな感じでですね、みんなが「お腹すいたー」とか言ってくれて、おかわりしやすい雰囲気、みんなが量はそれぞれなんですけど、完食しているのは学級が元気な証拠だなと思うときがあります。学級の様子がおかしくなってくると、牽制し合って本当はおかわりしたいのにしないとか、同じ子ばかりおかわりしているとか、平気で残すとか、そういうことが起こったりするので、給食も大事な時間だと思っています。もちろん、アレルギーのある子どもとか、食が細い子どもとかもいるので、それを強要するようなことはいけませんし、そこはデリケートに扱わなければいけないと思います。

少し自分の話もします。リフレッシュと書いたのですが、私自分の経歴をこう並べてみたら、4年に一度、何か環境を変えているというか、変わっていると気づきました。講師4年間、初任校で4年間、2校目で4年間勤めたあとに内留させていただいて、また4年なんですね。私は4年に一度

リフレッシュしているので、次は来年なのかなと思っているのですが、何が言いたいかというと、私が教員を始めたころは土日も学校に行き、仕事するのが趣味みたいな感じで、いつも学校に居るので、先輩の先生から気持ち悪がられたんですけど、でも、その頃はそうしたから安心して子ども達の前に立てたと思うんです。今は、先生自身の健康も大事だし、リフレッシュしないと元気に子どもの前に立てないので、日々リフレッシュすることが大事かなと思います。学生の皆さんには、ぜひ、今しかできないことをしていただきたいと思います。一度でもやったことのあることとそうでないこととは、えらい違いがあると思います。どんな経験でも、全てが教師になった時に引き出しになると思います。私は、子どもの時に歯の矯正をしていたんですけど、矯正している子がつらそうにしているのを聞くと、「うん分かる」とか言っている自分を見て、あの経験も良かったかなと思います。些細なことですけど、そんなことがあるので、勉強も大事なんですけど、ぜひ大学生のうちに、いろいろな経験を積まれるのが良いと思います。それから、教員になってしまうと、どうしても学校だけの世界で生きてしまいがちなんですけど、教職以外の職の方との繋がりも大事にしてほしいと思います。偏らない見方、幅広い見方が分かると思います。それから最後ですが、学校現場に出れば1年目だろうが20年目だろうが、一人前の教師として見られるわけですから、挨拶をするとか、時間を守るとか、社会人として恥ずかしくない常識、礼儀というものが大事なのかなと思いました。

今回は、このお話をさせていただいたことで、自分を振り返ることができましたし、大事なこともまとめられましたので、すごく有り難いと思っています。若い先生方が入ってこられるのは、学校にとっても新しい風が吹いて、すごく有り難いことなので、ぜひ、フレッシュな皆さんと、一緒に勤められる日が来たらいいなと思っています。ありがとうございました。

（会場）拍手

（2）パネリスト講演：

西田規子 鳥取市立久松小学校教諭

（西田）私の話を始めさせていただきます。鳥取市立久松小学校からやって参りました、西田といいます。よろしくお願ひします。5年生を担当しています。私のことを見たことある人いますか。意外と知られてない。

（会場）笑い

（西田）じゃあ話しやすいです。今日、私、実は誕生日なんです。

（会場）拍手

(西田) 私は、去年6年生の担任をしてたんですけど、去年の子ども達には28歳だと言ってたんです。

(会場) 失笑

(西田) これが、子ども達は意外と信じるんですね。「えー若い」とか言ってくれて、で去年1年間それで通しきりました。

(会場) 笑い、「すごいな」

(西田) はい、では始めさせていただきます。

皆さんの視線が、はい、うれしいです、ありがとうございます。先日、受験のプロっていう方に会って話を聞いたんですけど、面接の極意ってというのは、例え初めて会った人であっても、あなたのことが好きだってというビームを出しながら話をするんだそうです。面接官に対して、さっき会ったばかりでも、あなたのことが好きだよってという目をして話をしてください。それで、今日、聞くときもね、そんなふうに聞いていただけるとありがたいです。ぜひお願いします。今もかなりビーム出てますので。ただ、先ほどの瀧井先生のお話が全てですから、ちょっとこっくりこっくりなっても良いです。バイトで昨日遅かった人とか、色々ありますよね。なので、のんびり聞いてください。

急遽順番変わりましたが、はい、今日はイキイキワクワク学級経営ということでね、このイキイキワクワクは、先生もイキイキワクワク、子ども達もイキイキワクワクってイメージです。これは、わが校の児童会のマスコットです。子どもが原案を考えて、上手な先生がキャラクターをさらにヴァージョンアップして下さいました。これもそうです。これは、なしっこふじさん、さっきのはね、あいうえおヒーローズって言うんです。このなしっこふじさんは、2年生が考えたキャラクターです。はい、では、皆さんに近い存在といますかね、新採に聞きましたということで、話を進めていきたいと思います。皆さんが私の話を聞いてばかりではいけないので、こちらから皆さんに聞きます。現在4回生の方いますか、はい3回生の方、はい2回生の方、はい1回生の方、ありがとうございます。

では、我が久松小学校に2人の新採用教員の方がおられて、本当に1年前までは皆さんと同じ立場で、そちらに座ってらっしゃった方に聞いてみました。「八か月ですごく自信がついたみたいだけど、どうやってここまでやってきたの？」って聞くと、これ、さっきの瀧井先生の話とも通じるんですけど、「とにかく聞きまくる」って返ってきました。だから、学生さんには「コミュニケーション力って大事だよっていうふうだね、伝えてください」っていうことを言われました。「じゃあ、何か困っていることある？」って聞いてみました。そしたら、「なかなかルールを徹底させるのは難しいですね」「学級目標に向かってどうクラスをまとめて行ったらいいか困っています」「どうやって叱ったら子どもに響くんだろう」「仲間づくりが大切ってわかっているんだ

けど、うーん」「気になる子へ、どんな声掛けをしたらいいのか、どんな支援をしたらいいのか」等々、実はまだまだ沢山出てきたんです。もう次々と。私は、それを聞いて、「子どもや学級をよく見ているな、頑張っているな、よしよし」って思いました。沢山出てくるっていうことは、それだけ自分で学級のことを見られてるし、子どものことを一生懸命考えようと努力している証拠だな、大丈夫だなっていうふうに思いました。こんだけ出てきても、全然心配することはないんです。これは、私自身の日々の悩みと同じなんだなということも感じましたので、全然心配することはないと思います。

そもそも学級経営って何、ちょっとこの辺から真面目になってきます。なかなか普段こういうトーンで話をしたことがないので、ちょっとあっちの人、笑っていますけど、ここから真面目な話なので、しばらく我慢してくださいね。学級経営って何でしょうかっていうことですが、そもそも学校ってのは学校教育目標というのがありまして、それを実践していくのが学校経営であり、それは学校長が責任をもってやっていくものです。それを受けて学年目標があります。で、それを実践していくのが学年経営ということで。学年主任さんが中心になってやっていきます。さらにそれを受けて、学級目標を各担任の先生が作り、それを実践していくのが学級経営です。ざっと、こんなふうな流れになっています。そんなことは知っているよという人もあるかもしれませんね。

それでは、具体的に何をすればいいのってことですけど、教科指導、これは、国語、算数等のいわゆる教科の指導です。また、教科外の指導も沢山あります。それから、それぞれ個人にも対応するし、さらに集団にも対応します。これは、どの学校にもあるんですけど、だいたい5月の連休明けぐらいまでに、各担任が、学級経案を作成し、提出しなければいけないことになっています。で、これは、今、私の勤めている学校のものですけど、学校によっていろんな形式があります。項目もいろいろあるんですけど、どんな内容があるかと言いますと、まず、先ほどあげました学校教育目標があります。それから学年目標を書きます、次に学級目標を書きます。そして、4月の一か月間で、子ども達のことを、学習面とか、生活面とかを中心にしっかり観察して、今現在の学級の実態を把握します。それに対して、私の教育観ということで、自分がこの学級をどのようにしていきたいかということのを思いを込めてつらつらと書いていきます。だいたいこの学校でも、この教育観を書きますよね。皆さんが担任になった時にも、ここでは、本当に自分の思いを大事に、どんな学級にしたいかということを書けばいいんじゃないかと思います。これが一枚目です。二枚目には、もっと具体的に、その学級の目標に沿って、教科ではこういうことというように書くようになっています。これは、学校に勤めたら一ヶ月で書かなきゃいけないので、ちょっと知っておいたらと思います。

さあ、実際に私の学級経案から少し抜粋してきました。最初にこんなふうに書きます。一文がすごく長くて、決して良

い文ではないんですけども、ここに自分の思いを込めるようにしています。子ども達が暖かな学級の雰囲気の中で安心して学び、分からないことが分かるようになり、出来なかったことが出来るようになり、その成果や努力を、皆に認めてもらい、存在価値を実感でき、大変な事もあるんだけど、やっぱり仲間が好きだな、学校が好きだなというふうにしたいです。という思いを最初に書いています。まとめていうとこういう事だなという思いもします。子どもたち一人一人を人として心から大切にします。まずはそこがベースだなと、いつも思います。さらに誠実にそして一生懸命に。こういうのは必ず子ども達にも伝わるし、保護者の皆さんにも伝わっていくので、大事にしています。

大切にしていることですが、本当にね、3 人の話が、かなりかぶってくると思います。もう瀧井先生の話聞きながら、そうそう、その通りと思いましたから。まず授業が勝負ということです。これは、本当にどの先生も言われますし、皆さんももちろん分かっておられると思います。学校に出てすぐの年に、大先輩から、もう、今日から私はライバルだよと言われました。良い授業をするというのはね、経験とかは関係ありません。一生懸命に教材研究をして、子ども達をしっかりと見て、授業を組み立てていけば、誰でも、もう一年目から良い授業って沢山できます。自信をもって前向きに取り組んで欲しいし、いつか皆さんとライバルになれるんじゃないかなと思います。

それから、子どもをとにかくよく観るようにしています。ちょっとした変化も見逃さないようにして、本当に、ちょっと髪を切ったでも、新しい服になったでも、どんなことでも構わないので、子どもをよく見て、小さな変化に気づくようにしています。それから先ほどもありましたけど、とにかく褒めますね。褒める時に、私が気をつけていることは、平等に褒めるということです。この子のことを最近褒めてなかったということがないように、常に気をつけています。それから、これは大事ですね。さっきも出てきましたので、ここではあまり触れませんが、ルール作りは、実はとっても大事です。また低学年のルール作り、中学年、高学年と少しずつ違うんですけど、今、高学年を持っていることも多いので、高学年はやはり子ども達と一緒にルールを作っていくことが大事です。それから低学年は学校の基礎、生活が身についていくためのルール作りが大事かなと思います。また、仲間づくり、これが大事ですね。これがうまくいくと、明るい楽しい雰囲気になるので、授業がとってもやりやすくなります。それから先ほども出てきました、これも大事です。いろんな方とつながってチームで解決していきましょう。気になる子への対応、その子を中心としたクラス作りは大事です。必ず、どのクラスにも気になる子は出てくると思いますので、その子を中心にした学級経営をすると、学級が暖かい雰囲気になります。

若い頃ってなかなか難しい面もあるかなと思われる方もいらっしゃると思いますが、とにかく誠実に一生懸命にやっていたら必ず伝わりますので、そこさえ押さえておけば大丈夫かなと思います。あ、見てください、これは、今日

の朝の黒板です。気を使っていますよね。20 歳とか 27 歳とかね。子どもにすごく気を使わせてます。でも嬉しかったですね。帰りには、ハッピーバースデー歌ってくれて送り出してくれました。30 歳おめでとう。

(会場) 笑い

(西田) ということで、これは、この前の学習発表会の様子です。これは社会科見学に出たときの様子です。この人は、今一緒に学年を組んでいる相棒です。一生懸命に学ぶ目をして、学んでいますね。大学生に見せるよって言ったら、こんなにキラキラな笑顔でした。皆さんへのメッセージは「待っています」ということで、いつか、学校現場でお会いできるのを楽しみに待っています。ありがとうございました。

(会場) 拍手

(3) パネリスト講演：

前田 徹 八頭町立郡家西小学校教諭

(BGM)

(会場) 拍手

(前田) 今からゆつくり行きたいと思います。よーいスタート。

学級経営、私が大切にしているのは挨拶です。「じゃあ皆さんいきましょう、こんにちは」

(会場) 「こんにちは」

(前田) はい、いい感じですね、いい感じです。予想通り。でもね、子ども達に言うんですよ、「ちっちゃいよね、みんなもっと出来るよね」はい、あれ、いいね、ビーム来てる、ビーム来てる、ビーム来てる、いい感じ。はい、もう一回いしましょう。「こんにちは」

(会場) 「こんにちは」

(前田) いいね、皆さん笑顔になってきましたもんね。やっぱりね、笑顔であいさつするといいですね。私ね、タッチしています。分かりますか。子ども達が階段を上がってきて「へーい」、こうやってね。(学生とハイタッチ) いいですね。ごめんなさいね。

(会場) 笑い

(前田) 子ども達もそんな感じなんです。私ね、ちょっと自慢していいですか。10 年以上 1 日も欠かさず 20 分間ぐらい、ずっとやっています。今の学校は児童数約 300 人です。300 人の内、何人ぐらいタッチしてくれると思います。

(会場) 200人

(前田) いいですね。267人です。10何人してくれないんですよ。してくれない子って分かりますか。「高学年女子」、はい正解です。高学年女子はなかなかしてくれないんですね。今の学校に来て4年目で、今の5年生ね、2年生の時から知っているんですけど、この5年生のある女の子、となりのクラスなんですけどね、2年生の時から1回もしてくれたことがないんです。これが決まってから、この話をするのが決まってから、3日後に、なぜかタッチしてくれたんです。凄くないですか。僕、なんかオーラ出してたんですかね。たぶんね、「やってくれー」ってね。でもね、ずっと出してきたつもりなんです。いつも無視されるんです。出し続けて4年目で、やっとやってもらったんです。本当にね、冗談抜きで涙出そうでした。やっぱり諦めちゃったらだめなんだ。出し続けていなかったら、たぶんその子やらないですよ。学校の授業日が、1年間で、だいたい200日です。700日目くらいに、それまで1回もしなかった子がやっとやってくれた訳ですよ。凄くないですか。やっぱり挨拶ってやらせるものじゃなくて、伝えるものなんですよ。このように、自分の気持ちを伝えていくってことが、大事なんだと思っています。

皆さんは、「なんだこのテンションの高いおっさんは」と思われたかも知れないんですけども、やっぱり、ある程度テンションを上げて挨拶すると、子ども達もしっかり返してくれるというのはあるのかなと思っています。それから、子ども達には目を見てやろうねと言うんだけど、時々こんなで覗き込んだりすると、笑ってくれたりして、その中でコミュニケーションを取っているのだと思います。また、今年大事にしている事ですが、笑顔です。怖い顔で挨拶されたら、子どもは「お、おはようございます…」となりますよね。ですから、やっぱり笑顔でということに気を付けています。

次に、繋がるということなんですけど、教師対子ども達、私と子ども達が繋がるということはすごく大事です。それから子ども達同士を繋げていくこと。私は、学級経営の中で、この2つが凄く大事だと思っています。教師対子ども達ということで、子ども達が、私のことをどう思っているのか、緊急アンケートをとってみました。これ、実際にやったものです。1人3つまで書いていいですということで。私の学級が25人ですから、75票あります。さあ75票の内訳、どうなったと思いますか。「やさしい」が25人中4人です。同じ4位で「勉強の教え方が上手」、次が3位で「運動神経が良い」、先生にとって特に関係ないですよ。でも、子どもって、そういうのが好きですね。さあ第2位です。11票以上ですからね、半分近くの子が思っています。「怖い」です。「普段は怒らないけど、怒るととっても顔が怖くなる」とか「本当にいけない時は叱って」とか、怒ってばかりじゃない。いい感じでしょ。1位は「面白い」です。私は、自分がこういう先生になりたいと思うものが、4つって決まっているんですよ。「やさしくて、怖くて、面白くて、かっこいい」

先生です。見てください、「やさしい」「怖い」「面白い」が出てきました。また、私のよくないところを正直に書いている子もいます。ちょっとへこみました、大事なことです。良いことばかりじゃなくてね、そういう所もしっかりと子どもが伝えることが出来る関係ってね。私は大事なことがなっていると思っています。

さあ、どうやって繋がるんですか。「聞く」、子ども達は聞いて欲しいんですよ。「うそー、あんたこんなによろ喋べって、本当に聞けるの」と思われるかもしれませんが、聞く時は聞きますよ。

(会場) 笑い

(前田) こう見えて、聞く事も出来るんです。聞く時に、こちらがいろいろと喋っているとね、子ども達も、始めはぼつぼつだったのが、どんどん喋り出して、「あ、実はそういうふうに思ってたんだ」と、こちらが聞いてないことまで聞けるってことで、凄く大事なことだと思っています。伝えるって、どういうことかという、やっぱり、こっちの考えというのを、子ども達に伝えないといけないです。どう伝えるかということが凄く大事なことだと思うんですけど、個人的には、私は喋るのは得意じゃないので、どうやって伝えるかっていうと、あまり喋らないんですね。何言ってるのって。前田先生のちょっと変わった伝え方、バースデーカードですね。私は担任してから17年間、必ず子ども達全員にバースデーカードを渡してます。誕生日のその日に。今までに500通くらいになっています。内容は、今まで、凄く言われたんですけど、子ども達のことを褒めるんですね。自信をもって欲しいんで、ずっと見てきて、ここが凄くいい所だよとか、がんばっているよとか、子ども達にしっかり伝えてあげないといけない。それを、いっぺんに全員に書くのは大変じゃないですか。誕生日だったら、多くて1日2人ですよ。大抵1人。1人のことを、誕生日の前日に手紙を書くくらい、そんなに難しいことじゃないではないですか。それで、私はずっと続けています。今、二十歳くらいになった子が、「先生、家に飾っていて、僕は、それをいつも見て頑張ってる」って言ってくれるんですよ。それを聞いた時に、あれ、もうちょっと良いこと書かないといけないとか、もっとしっかり子ども達を見ていかないといいなとか思いました。

今年は変わった伝え方をやっているんですけど、毎朝、黒板にメッセージを書くようにしたんです。私はよく喋るでしょ、いらん話をしちゃうんですよ。そうすると子ども達はいらん話ばかり憶えてるんですよ。真面目な話は、聞いている子は聞いているんですが、聞いてない子っているじゃないですか。どうしたらいいかなと考えて、一回黒板に書いてみたんですよ。そしたら、いつも聞かない子がね、「先生今日こんなことを書いてったな」って言ってきたんですよ。あ、結構書いていたら読んでくれるのだと思って、今年は書いています。

それから、私は高学年の担任が多いのですが、男子、女子とお互いに意識をしてしまい、いろいろ触れ合いをさせた

い時になかなか出来ないということがあります。例えば、握手しようなんて子ども達にとってすごくハードルが高いですよ。でも、ハイタッチだけだったら、皆さんでもしてくださるじゃないですか。小学生でも、「イエーイ」とか言ってやってくれる。僕は、ちょっと触れるだけでも、大事なコミュニケーションの 1 つかなと、思っています。そういう「イエーイ」ってやることによって、笑顔が増えて、会話も増えてくるということで、ちょっとした体の触れ合いなんかがすごく大事なかなと思っています。

次に心を 1 つにということで、1 つのことを皆でやるってすごく大事なことです。でもそれが難しい。名札を付けるのも難しい。私は、靴を揃えることを皆でやろうって言っていますが、3 日頑張れば 1 年間続きます。そうやって心を 1 つにしていく、ってこともあります。例えば、帰りのパチンで簡単ですね。やってみましょうか皆さん。僕が「せーの」って言いますよ、「パチン」って叩いてください。いいですか。「せーの」

(会場) パチン

(前田) いい、気持ち良くないですか、もうちょっと揃っても良いかな。もう 1 回やってみようか。「せーの」

(会場) パチン

(前田) いいですね、これね、どんどん増えていくんですよ。「せーの」っていったら 1 回、2 回目の「せーの」で 2 回、3 回目は 3 回叩くんです。ちょっとしたことなんだけど、心が一つになっていくんですね。それから、合言葉、合言葉って結構大事ですね。これは、今年の郡家小学校の合言葉なんです。誰が作ったか、私で作ったんです。今年、生徒指導主任をしているので、全校に、これを言ってるんです。これね、1 年生の子が、言ってくれるんですよ。「さっと靴揃え、忘れず、時間を守る、中略、にっこり挨拶」という合言葉なんです。挨拶をしてくれない 1 年生がいた時にね、「にっこり」って言うよね、「あいさつ」って言ってくれる訳です。合言葉を 1 つのきっかけにして、「よしがんばるぞ」とか「これしないといけないな」とか思い出してくれたりするので、大事なことじゃないかなと思っています。

次に、観察と支援ということです。先ほどもあったのですが、子ども達のことをしっかり観るということが、第一かなと思います。観たら、気になる事が出てきて、なんとかしなければいけないということになると思うので、学級経営って、その繰り返しのかなと思っています。ひとり一人をよく観察して、その子に合った声かけや接し方をする事が大切です。皆が同じやり方じゃないと思うんです。だから、この子にちょっと厳しく言った方がいいなと思う時もあるし、この子にはちゃんと気持ちをくみ取ってやらないといけないなと思う時もあります。また、同じ子でも、今日は、この感じだとなかなか話してくれないぞということもあります。そこは普段観ているからこそ、柔軟に出来るのかなと思っ

ています。やっぱり、日々、子ども達をしっかりと観ていくということが、一番大事なかなと思います。私ね、大切なものだけドスキルとかないんですよ。でもね、私は、それよりも徹底していくことがすごく大事だし、それが自分の長所だと思っています。毎日挨拶し続けるとか、毎日黒板に書くとか、そういうことは、私にとっては苦ではなくて、自分のやり方なんです。だから、先生方に同じことをしてくださいって言っているんじゃないんですよ。自分の良さを徹底して生かしていくことが大事だと思っています。ただ、徹底ってすごく難しいんですよ。例えば 4 月に、「このことは怒るよ」「このことは怒らないよ」と言ったのに、5 月になったら、怒るよって言ったことを怒らずに、怒らないよって言ったこと、怒ったりとかすると、子ども達は、「なんだ、この先生」ということになり、絶対についてこないですよ。だから、自分の言葉には責任を持って実行していく。それを 1 年間やれた時に、子ども達と繋がりが合えたのかなと思える瞬間がやってくるのかなと思っています。

私、自慢ですね、「学校が楽しいな」と思った日しかないです。楽しくないとか、行きたくないとか思ったことがないですね。毎日楽しいです。辛い時はありますよ。辛い時はありますが、辛いことも楽しいです。辛いことも楽しい、この人はおかしいのか。違うんですね、辛いことは上手くいってないことですよ。上手くいってないことは、上手くいく可能性がある訳ですよ。では、それはどうしたら上手くいくのかなと考えると、自分の中ですごくわくわくしてくるのですね。もっとこうしたら上手くいくかもしらん。なんで、あの時、あんな声かけをしたんだろう、こう言えば良かったんじゃないかななどと考えていくと、次の日が楽しみになるんですよ。じゃあ、今度は絶対に、朝、この子に、こんな言葉をかけようかってね、楽しむことはすごく大事なことじゃないかな。先生が楽しんでいたら、たぶん子ども達もやっぱり楽しい時間を過ごしていけるのかな。

学級経営をしていると、いろいろな問題行動が起きてきます。そうすると、何らかの対応をする訳です。あまり具体的にじゃないんで分かり難いですが、私はとにかく信じます。「わかった、信じる」と本気で信じます。そしたらね、また問題行動が起こるんですよ。信じていても、子どもですから。もう絶対しませんと言ってもやりますよね。裏切られる訳です。でも、やっぱりほっとけないから、なんらかの対応をする訳です。私は、これがずっと繰り返していくと思うんです。子どもは信じられると嬉しいですよ。ここで、信じるのが出来なくなっちゃった時に、子どもは裏切りっぱなしになっちゃうんですよ。なんらかの対応をしたならば、裏切られるのを覚悟で信じ続けていかないと、なかなか子ども達は変わらないんじゃないかな。その結果、子どもの成長ということになっていくのかなと思っています。

最後に。今しか出来ない経験してくださいということです。学級経営っていろいろなことがあると思うんですよ。例えば、西田先生や瀧井先生がされることを真似をする。真似って大事なんです。だけど、したからといって、同じ結果

は出ないんですよ。同じことをしているのに上手くいかないということは、絶対にあります。それは、それまで歩いてきた道が違う訳だから、土台が違うんですよね。どれが良いとか悪いとかじゃなくて、土台が違うので、同じことをしても、同じ結果が出るとは限らない訳です。もちろん良い結果が出ることも沢山あります。だから、大事なのは、簡単に言うと、今は、人間力を磨いていく時期じゃないかなということです。自分がやってみたいことや一生懸命になっていることを夢中になってやる、そういうことが自分を磨いていくことになって、結局、社会に出た時に、すごく役立つことになるんじゃないかなと思っています。

時間が延びたので、この中を見せることはできません。はい、気になりますか。こんな話をする人間が何を持って来ているんだろ。結局、学校ってワクワクする場所であって欲しいな。ワクワクする状況を作っていくことが大事かなって思っています。では少々時間をもらったので、実は1枚の手紙が入っているんです。これは、皆さんの先輩の方から貰ったんです。私が担任をしていた子で、今、小学校の先生をしています。その子が手紙をくれたんです。その手紙にこういうことが書いてあるんです。

(当時のその子の悩みと先生がかけた言葉を紹介)

その子はね、その言葉がずっと心に残っていた。私は、もちろん、その時は一生懸命にその子に対してその言葉を投げかけたと思います。自分の中では、1年後、2年後には、どっかにその言葉が消えていましたが、その子にはずっと残っていて、「自分もそういうふう子ども達に元氣や勇氣

を与えたい」と言って先生になってくれたんですね。自分達って、こうやって喋って毎日を過ごしているのだけど、その一言が、子ども達を勇気付けたり、その逆であったりして、子どもの人生を大きく変えることもあるんですよね。だから、自分の言葉には責任を持たないといけないということを改めて思いました。皆さんがね、学校現場に出られた時には、ぜひ自分の言葉に責任を持って頂いて、楽しみながら、一生懸命子ども達と関わって欲しいと思います。私は、この仕事はとっても楽しい仕事だと思っているので、皆さんと一緒に働ける日を楽しみにしています。

とっても長い話になってしまいました。ありがとうございました。

(会場) 拍手

(小谷) 3人の先生方が大変熱心に中身の濃い話をしてくださいましたので、時間がきてしまいました。質問等があることと思います。配布してある感想用紙に、それも含めて書いて頂いたらと思いますので、よろしく願います。それでは、今日の3人の先生方に感謝の気持ちを込めて、もう一度拍手をお願いしたいと思います。

(会場) 拍手

(小谷) 終わります。

テーマ2 「関係機関との連携」

(小谷) 今日はこれから第2回目の学びのパネルということで、パネルディスカッションを開催いたします。

内容についてはこれから紹介があると思いますから、最初に講師の先生を紹介いたします。

まず1番手前座っておられる先生ですが、浪花英樹先生です。鳥取県のいじめ不登校対策センターの指導主事としておられます。

次は坂口景亮先生です。鳥取市立河原中学校の教員です。今までいろんな中学校に務められてですね、かなり荒れた学校も経験しておられます。生徒指導の実際について、いろいろ詳しくお話が聞けると思います。

では、國富一郎先生です。鳥取市教育委員会でスクールソーシャルワーカーをしておられます。みなさん、SSWってなんだろうなあって思いながら今考えてる人もおられると思いますが、また話の中でSSWってなんだろうかってわかってくると思います。

(石本) はい、じゃあ今日の簡単な流れと趣旨を説明してから、各先生方にお話をいただきたいと思います。まず今日の流れですけども、今、先生方の紹介を小谷先生の方からしていただきました。で、趣旨説明を今からいたしますけども、このあと、各先生方から20分程度ずつお話をいただきたい

と思っています。そのあとに、5分程度全体討議と書きまじけども、私の方からちょっと確認のような質問をさせていただければなと思っています。まあこのへんは時間の都合によっては圧縮したり割愛するかもしれませんが、そのあと15分程度出席してる皆さん参加者と質疑応答って形にしたいなと思います。

ひとつスライド戻りますけども、今日のテーマ、学校における関係機関との連携となっています。今学校では、扱わないといけない問題っていうのがすごくたくさんあります。もちろん、勉強も教えないといけないですし、部活動の指導だったりとか、生徒指導だったりとか、というのもあるし、挙げていけばきりがありませんけど、キャリア教育もしなくてはいけない、場合によっては心理教育もしないといけない、防災のこともしないといけない、アレルギーについても対応しないといけないというふうに、本当に、山ほどあるんですよね。でもそんな中で、学校の教員だけでは、なかなか難しい時がある。そういう時に、関係機関との連携——関係機関というのはね、もちろん、学校内で教員同士だったりとか、教員以外の職種だったりとかと連携していくことも大事ですけども、学校外との連携っていうことも当然大事になってきます。私自身も、学校外の機関として、特別支援巡回相談員っていう形で学校に行って、教員と話をして、って

いうこともしてましたけども、そういった時にね、これはちょっと教員の人にとっては若干失礼な気もしないでもないですけど、よく言われるのは、学校の先生っていうのは、基本的にクラスの子ども達をずーっと面倒見るっていうことを、教員養成課程とかで教わってきたので、基本的に、丸抱えになってしまったりとか、もしくは、他の機関につながってしまったら、今度丸投げになってしまったりとか、結構そういう形になってくることが今まで多かった、ていうようなことも言われたりします。実際に巡回相談員として行くときも、「もうちょっと早く言ってほしかったなあ」っていう時が何度かあるんですよね。早めに言ってもらえたらもうちょっといろいろな手が打てたのに、ここまでできてから手を打つのはなかなか大変だなんていうような場合もあったりします。そういったことで、連携っていうのは、早めにしていくってことが大事なのかな、というふうに思います。今日は、いろんな立場の先生方からそういった連携について話を聞きますので、連携についての必要性和か理屈とか、どういう連携先があるかっていうことは、僕自身も授業でもお話してと思いますし、他の授業でもいろんなところで聞くと思うんですけど、でも、それだけじゃ実際皆さんが教員になった時にどう連携していいかっていうことがイメージつきにくいと思うんですよね。なので、実際の現場で働いている先生方からそういったお話を聞いて、具体的にどんなふうにしていくのか、というようなことを今日知る機会にしてもらえたらというふうに思います。じゃあ先生方からお話をいただきたいと思います。浪花先生からお願ひしてよろしいですか。お願いします。

(1) パネリスト講演：

浪花英樹

いじめ・不登校総合対策センター指導主事

(浪花) 皆さん改めましてこんにちは。

(会場) こんにちは

(浪花) ありがとうございます。さきほど小谷先生が、ふと声かけられたら、さっと静かになるところを見て、あ、なんか教室みたいだなってちょっと思いました。25 年位前私も、鳥取大学の学生だったので、こういった授業を受けてたと思うんです。この時間になると眠たくなってしまって、よく寝てたなって思いますけど、皆さん大丈夫ですかね。しっかり起きておられますね。現場に約 23 年ぐらい、小学校の方に勤めていまして、昨年から鳥取県の教育委員会の事務局の方に変わりました。教育委員会というところが何をするとところかが、1 年間わからないままに過ぎてしまって、今年少しずつわかってきて、色々な動きが出来るようになってきました。今日こういったお話の場を頂いて、是非皆さんにもお伝えできること、役立ててもらえることがあればいいなと思っています。現場で小学校の教員をしながら、10 年位経ってから船上山少年自然の家、ご存知ですかね。鳥取県

の方はご存知かも知れません。そこに 8 か月くらい行かしてもらったり、それから幼児教育の研修、研修というか社会体験というような形で、1 年間でさせてもらって、小学校の教員なんだけど、いろいろな社会教育だったり、幼児教育だったりという場を経験して、少し視野が広がったかなと感じています。学校しか知らないと、割りと保護者との対応も上手くいかないことも沢山あるんですけども、そういうところでいろんな関係が作れていると、それが強みになったというふうに思っています。そういったお話もさせて頂きたいなと思います。

「いじめ・不登校総合対策センター」っていう名前をこれまで聞かれたことがある方。ちいさく挙手をしてください。無いですか、無いですよ。私もそこに変わるよと言われた時に、何をするとところなんだろう、と全く分からないままに行ったんです。主に生徒指導、小学校中学校の生徒指導を担当しています。高校とか特別支援学校の方は高等学校課特別支援教育課ってところがあるんですけども。小中の生徒指導ということで、いじめの相談に対応したりとか、不登校の今言った教育支援センターとかフリースクールとかそういったことも対応していく場所です。鳥取県内のいじめと不登校の状況ということで、まずは不登校の状況を見てみたいと思います。平成 27 年度がいちばん右側で赤く示しています。これは小学校が 154 人、中学校で 434 人、高校で 207 人ということで、高校の 207 の中には辞めてしまった、退学してしまった子は入っていません。確実に数が最近増えているということが分かります。数は増えているんだけど、元になる子ども達の数も減っているの、そうすると、不登校になる確率が上がっていくことになります。平成 22 年から 0.33 (%) だった小学校がずっと右に行くにつれて 0.51 というところで、この数字は全国でも TOP10 に入ってしまったんです。鳥取県の子ども達は不登校率は今、とっても高くなっています。中学校は一時期、平成 22 年にちょっと高いんです。それからいったん減少したんですが、またそこから少しずつ増えているという状況があります。全国に比べれば平成 27 年度は中学校はすこし鳥取県は全国を下回ってますけども、この先は心配な状況が続くかなと思われれます。

で、そういった子ども達が、どういう機関と連携するかということで、先ほど言いました教育支援センターでして、教育委員会が立ち上げて学校不適應、不登校の児童生徒が通っている場所です。不登校だから必ず通うという訳でもない、通っているのは 1 割無いぐらいのところ、通える子が増えていくといいなと思います。その他には、民間の、フリースクールなどがあります。鳥取県内で、県の方で把握しているのは 4 つのフリースクールです。東部に 2 つ、中部に 1 つ、西部に 1 つ、くらいなんです。適応指導教室(教育支援センター)は県内で 10 か所あります。中部には 5 市町あるんですけど、そこで 1 つしかないという状況です。

不登校になる要因ということで、ここは家庭にかかる要件というのは確かに大きいんですけども、学校の教員として、家庭のせいだと言っていては、なかなか不登校に対応していくことは出来ない、家庭以外の方を注目しようとい

うことにしています。その中でやっぱり目立つのは、友人関係ということになります。コミュニケーション不足だったり経験の少なさで、上手く関係が作れないということが、原因の多くを占めます。それから1%ではありますけど、いじめです。いじめで不登校になると法律では重大事態となります。ここまでは小学校です。

中学校では、家庭の要因はぐっと減るんですけども、友人関係は同じくらい、そしていじめも1%というような現状です。勉強のことも出てきますので、こう言ったようなこと（学業の不振・進路に係る不安）も大きくなってくるということです。

では皆さんに、いじめの認知、こういうのをいじめって言うんですか、っていうのを、考えてもらおうかなって思います。ではちょっと読んでみますね。（定期的に実施しているアンケート調査でBがいじめを受けたと回答した。そこでBと面談して確認するなどした結果、以下の事実があったことを確認できた。体育の時間にバスケットボールの試合をした際、球技が苦手なBはミスをし、Aからミスを責められたり、他の同級生の前で馬鹿にされたりし、それにBはとても嫌な気持ちになった。みかねたCが「それ以上言ったらかわいそうだよ」と言ったところAはそれ以上言うのをやめ、それ以来BはAから嫌なことをされたり言われたりはしていない。その後Bもだんだんとバスケットボールが上手くなっていき、今ではAに昼休みにバスケットボールをしようと誘われ、それが楽しみになっている）こういったケースをいじめだと思いますか？ちょっと近い席の方と30秒くらいいじめでは？これはいじめじゃないでしょ？とかちょっとそんな話をしてみただけですか。はいお願いします。

（会場）相談中

（浪花）はいありがとうございます。素晴らしいですね。お願いしますと言ったらすぐ話のはじまって、「はいっ」と言ったところでぐっとこらえて頂いて本当にありがとうございます。ではどうでしょうか、話をされて、いじめじゃないと思われた方、小さく挙手。ありがとうございます。小学校ではね、指先まで真つすぐ伸ばしてって言うんですけど、なかなかね、大人になってそれはね。はい、これはいじめじゃないでしょっていう方。はい。ありがとうございます。多いですね8割ぐらいかな。鳥取県では、鳥取県の小学校ではこれはほとんどいじめとは思われていません。ですが、全国的にはこれをいじめと認知している都道府県は沢山あります。そこに差が、かなりの差があります。で、文部科学省は「これはいじめです。」と言っています。なので、鳥取県の認知は低いのかなという所を、反省しないといけないのかもしれないですね。ポイントとしては、皆さんがいじめじゃないと思われる方はやっぱりここですよね。仲良くなった。仲良くなったらいいいでしょ、途中嫌なことがあっても。だけどいじめの認知のポイントは、ここですね。「Bはとても嫌な気持ちになった」ここの、受けた側の気持ちということが一番

大事。認知のポイントになってきます。その後仲直りが出来ても、やっぱりここの「嫌な気持ちになった」という所で、どういったかわりが求められるかということです。これがいじめと認知して先生と相談した時に対応があったとか、しばらく様子を見守るから、君の方もまた何かあったら教えてね。最近どうだい？って様子を聞くとか、そういった対応がなされるということが求められています。いじめを認知して解決した100%解決した、っていうような形にもっていくことが、いじめを大きくしないっていうことにつながる、という考えです。そうすると、鳥取県のいじめの認知件数ですけども小学校270件、中学校で179件ってことで千人当たり8.7人ぐらいのいじめが発見されています。学校で先生方がこれいじめだよって思ってください、対応する。全国だとその数字が千人当たりで16.4ですかね、倍くらいいいじめの認知がされていると。だからこれだけ対応がされているということです。で、このグラフを見ると、認知が進んで、また下がつてまた増えて、っていうようなことで。別に子どもたちが暴力的になって、急にいじめを始めた、という訳じゃなくて、先生方が積極的にそれはいじめだと判断して対応されている、というような状況です。なぜそうなるかという、滋賀県の大津市でいじめの事件がありました。その事件があった際に、学校が把握していないとか、教育委員会が事実を確認していないとか言って、隠してるんじゃないか、というようなことになりました。で、その報道が出たのが平成24年、事件があったのは前年の23年でした。もっと積極的に認知をする必要がある。ということで、数字は上がって、法律も出来ました。それに安心した、という訳ではないのかもしれませんが、翌年数字が下がる。下がってしまう。また、昨年の7月です。ご記憶の方もあるかも知れませんが、岩手県で中学生が担任の先生と生活ノートでやり取りしてたんですけども、先生も、そこまで深刻に考えなくていいんじゃない、という対応をされて、関係性の中でのそういうやり取りだったと思うんですけども、周りの先生方が何もそれを知らなかったと。そういう思いを生徒が抱えてるということが分からなかった、ということで、担任が丸抱えしてしまってる状況から事件が起こってしまった。なので、再調査がかかりました。鳥取県は再調査しなかったらこのまま横ばいになってたんですけど、再調査の結果、数字が増えました。その時に文部科学省は「鳥取県もがんばられました。」というふうな評価をされました。今年度はそのままの流れで同じぐらいの認知件数ですが、全国的には鳥取県の認知は平成25年は44位2.4人しかいじめだと認知されませんでした。これは、「こんなのいじめにしてたらきりがないじゃん」というような考え方だと思うんですけども。じゃあ、いじめって何、ということでことが大きくなって手が付けられなくなった様なのをいじめと言ってたら、それこそ、学校だけでは対応できない状況になってしまいます。再調査で、鳥取はがんばりました。28位まで上げてきました。認知件数は1000人あたり8.7件。このままどんどん認知が進んで、いじめがどんどん発見されて、先生方が子どもの痛みや、悲しみやそういうものに寄り

添って対応されていくのかと思ったんです。翌年、同じ 8.7 人なんです、他県も頑張ったので鳥取県は 35 位に下がってしまった、というような 27 年の状況です。で 28 年度は、いじめ・不登校総合対策センターがどんどん認知してください、というふうにお願いしていますので、学校の意識も少しずつ変わってきて、どんどん今認知が進んでいます。来年はこれ位になるのかなと、ちょっと期待をしている所です。ちなみに 1 位は京都府です。10 人に 1 人がいじめられているってというような状況が上がっています。なぜこんな 10 人に 1 人なるかっていうと、学校で行われるアンケートで、いじめられたって答えた子に対しては、必ず聞き取りをして、それがいじめかどうか確認をされて、で対応されていると。対応すれば、もうそれはいじめの認知というふうになっているという様です。なので、いじめのどんな中身かっているのも、「ひやかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」そういうのが圧倒的に多いです。以前だとね、こんなのはいじめじゃないとか、いじりだとか、いじめの前兆だとかって言うてたんだけど、そういうのはすべていじめになります。法律上では。だから、社会の一般的な人がとらえているいじめ、というのは狭い部分かも知れません。法律ではおっきな括りがあるので、その差が心の中で認知の差に出ていると。そこで、救ってもらえない子たちが、とてもつらい思いをしているということに早く気付いていかなければいけないかな、という状況です。

でこれ（いじめの対応状況）も特徴的だったんですけども、いじめが発見されて、それで外部機関とつながっていることを示している表で、鳥取県はわりとつながるケースが多いとわかります。全国的には 0.何%だから外部機関につながらなくても、いじめが解決している、というのが全国です。それは初期段階で対応されてるからだと考えられます。ことが大きくなってしまってからだと、間に合わなくなっちゃう、というようなことです。例えばこんなことも起こると思います。いじめに関して保護者の認識も大きく違います。「うちの子がこんなことされた、これは法律上のいじめに該当するんですよ」と言われる。保護者が、学校の先生だったり弁護士だったりすると、法律について知っている場合がありますので、なんだかの回答をしないとイケません。「うちの子がこうしたらいいけど、そんなものいじめって言うてもらっちゃ困ります」と言われることもあります。それから「うちの子がいじめられたって言われるけど、その程度のことはいじめだって言わないでください。いじめられたら、親としても気持ちが悪いから」みたいな保護者もある。そんなところで、学校として担任一人の考え方じゃなくて、学校としてこう考えています、というような説明が必要になってきます。

皆さんがこれから免許を取って、学校の方で、先生と呼ばれるようになった時に、とにかく、仕事が沢山あります。授業を教えたっていう仕事の他に、生徒指導だったり、その他の公務の分掌の仕事だったり、沢山仕事がありすぎて、本来の授業を教えるとか、子どものやる気を起こすとか、そういうことが十分できなくて、ほんとに、こんなことするために

先生になったのか、みたいな思いを抱くかもしれません。保護者対応が難しくなっているっていうこともあります。そのような中で、なんとかチーム体制を整えていくっていうことが今は考えられています。従来では校長先生のリーダーシップの下で、こんな風な学校の形でした。皆さんが通ってこられた小学校中学校も、こういった形だったかもしれません。でもその形が学級王国とかって呼ばれ方をして、他の人は知らない、となりのクラスは何してるかわからない。だからどの子が大変でとか、担任の先生がどんなことで困っておられるか、ってことがわかってない。現在では少しずつそういうことが改善されて、こういった形になりつつあります。それでもまだ、いじめの認知が進まないって状況を考えるとまだこういった（前者の）様なスタイルも、多いのではないかなと思われれます。しかし、これからの学校はこういった（後者の）形を目指すべきではないかと言われてます。こういった（後者の）形をとるためには、校長のリーダーシップが大切なんです。いくらトップダウンでいってもね、なかなか他の先生方が動けないってこともあるんです。中堅を担う、生徒指導の担当の先生だったり、人権教育担当だったりとか、教育相談の担当の先生だったりとか、上手に先生方をコーディネートする、先生方の個性を把握されて、人柄を把握されて、強みを知っておられて、それで上手に管理職の先生との間を取り持てる、そういったような先生の存在が求められます。副校長先生ってこともあるんですけども、ここも大変な立場になっているでしょうから、この生徒指導担当ってのはとても期待されています。

最初の石本さんの紹介でもありましたが、スクールソーシャルワーカー、この言葉、聞いたことあったという人、手を上げて頂けますか。あ、何人かありますね。流石ですね、ありがとうございます。私は現場に行ったときに、スクールソーシャルワーカーというのを聞いたことが無かったです。市町村に配置があれば、学校にこられるので分かるんですけど、自分が勤めていた学校の教育委員会は配置していませんでした。スクールカウンセラーは知ってたんですけども、スクールソーシャルワーカーは分かりませんでした。略して SSW って書くんですけども、ソーシャルスクールワーカー？とかスクールスキルワーカーとか、なんて読むんだろう、と全然わからないままに、去年の 4 月この事業を担当して困ってました。やっていくとほんとに大事な視点なんだと、分かってきています。こういったような問題（いじめや不登校や非行など）が学校では起こっていますけども、これは見えていることであって、その問題の背景にあるのは、家庭のこと。困っているのは子どもであって、子どもが困っているんだけど子どもではどうしようも出来ないことをなんとかしようとする。学校の先生からもここはなかなか見えない部分ではあって、そこに介入できる、出来るというか機関とつないでいけるっていうのが SSW の存在です。ただ SSW があって、スーパーマンという訳ではなく、何でもできる人という訳じゃなくて、黒子のような動きで、自然にそこそこの関係を作っていくっていうことが期待されています。スクールカウンセラーが平成 7 年から導入

になって、子ども達の心理面について、専門的に支えてはきましたけども、SSWは福祉の専門家という立場で、社会福祉士、精神保健福祉士、または学校の先生を退職された方、などが県内でも活躍されています。これが鳥取県の全体図を示しているもので、SSWが関係機関、学校、それから児童生徒の背景にあるものを伝えていく、それで少しでも改善していく、というようなことを期待しているところです。なかなかこのワーカーの動きも、学校の先生方が理解できて無い部分もあるので、このケースをスクールカウンセラーに繋いだらいいのか、SSWにお願いしたらいいのかかわからない、みたいなことで悩んでおられる学校もあるんですけども、そこで悩まれるよりは、みんなで一緒に集まって、その事例について話し合っていく、そしてプランを立てていくってことが大事になっています。鳥取県のSSW活動事業ですけども、市町村では今ワーカーが予定では32人になるのかな、それがなかなか人が見つからないというような状況があって、28名今勤務をしてもらってます。それでも例えば、2名って書いてても、1名しか見つかってない。その仕事をしてもらってない、みたいなこともあって人が足りてない状況があります。なので県の教育委員会としても、資格を持っている方に研修を受けていただいて、主に社会福祉士や精神保健福祉士の方は、医療現場とか児童相談室とか、そういったところでお勤めの方が多いので、そういった方に、学校文化を理解していただいて、SSWとして学校に関わっていただくような動きを今作っている所です。県立の高等学校や特別支援学校にも、今、配置が進んでいます。これだけの学校に配置があって、配置がない学校にもニーズはありますので、そういった生徒たちにも対応してもらっているということです。SSWは主に学校で何をやっているかという、生徒が抱える状況を把握して、そして情報収集をします。そしてケース会議を開いて、そのなかでどういったプランを立てるか、そしてプランを実行して、その結果どうだったかということで、アセスメントをして、またケース会議。この流れが出来てきます。SSWがいないとこれが出来ないか、ってなると困っちゃうので、SSWがいなくても先生方だけでこれが出来るようにしていこう、というのが今の狙いです。なかなか学校の先生は、忙しい中で「ケース会議までちょっと出来ないよ」と思うこともあるんですが、やはり、子どものためということであると、先生方はやる気がぐっと湧いてきますので、ほんとにこの子のために、どういった関わりが必要なのか、を考えていくと。ポイントとしては、誰が誰に、何をするか、ということが具体的に決まっていくこととか、セオリーではこれなんだけど、今はこれはちょっと、やっちゃいけないよね、というようなことを確認し合う。参加者みんなで決める。ちょっとやったけどすぐ止めるじゃなくて、みんなである一定期間つなげて、続けてみて、それでまたケース会議、改善をはかっていくという様な流れが期待されています。最後にSSW活動事業における成果ということで挙げていますが、資料の方を確認してください。

鳥取県に、社会福祉士や精神保健福祉士の資格を取得で

きる学校がない、ということで、県外から資格を取って帰ってこられた方や、通信教育で取られた方が、それを活かしていく、という場を設定していくが必要かなと思っています。ぜひ、皆さんの中でもSSWってちょっと学校の起爆剤になるかなと、感じられる方がありましたら、勉強してみたいかがでしょうか。

課題というのはまだ沢山あるかなと思います。学校が抱えるのは、多忙化、それから多忙感。忙しくなっているだけじゃなくて、忙しいなって先生が感じてしまう、ってことも大きなストレスになりますので。それから孤立化。ほんとに学級担任がいろんな問題を丸抱えしてしまう、っていう状況に陥らないようにということが必要かなと。そのためにSSWが「ああしてください、こうしてください」って言わなくて先生方の支えになるという様なことが求められています。鳥取県も平成31年度までに、全19市町村にSSWを配置するとしています。来年度もあと4つぐらい配置が進むのかなと期待をしている所です。

なかなかちょっと抽象的な話も多かったので、難しかったかもしれませんが、ご清聴ありがとうございました。またこの後もしっかり頑張ってください。

(会場) 拍手

(2) パネリスト講演：

坂口景亮 鳥取市立河原中学校教諭

(坂口) こんにちは

(会場) こんにちは

(坂口) 現場で働いています。鳥取市立河原中学校で、生徒指導主任をしています坂口と言います、よろしくお願いします。資料はつけてませんので、前を見ていただいたらと思います。

(事例Aについて)

今日のテーマになるので、彼に対して何ができるのかという所を話していきたいと思います。少年サポートセンター、児童相談所、それから校区の不適応対策委員会という会議があります。小学校の先生や中学校の先生や幼稚園の先生と一緒に話をする。それから教育委員会とか。中一の時にとにかく教育委員会に情報をあげてくださいと、校長にお願いをして、指導主事の方々がどんどん見にこられたりしました。いろいろアドバイスをもらったなかで、問題行動が発生したときの指導場面で、約束を決めなさいと、授業にはいれない実態なので、参加できる授業を決めてはどうかと。この授業は出たので、比較的出やすかったんで、これは出ようかと約束をしたりとか、授業に参加できない場合は相談室で自習をしよう、という様な話もして約束の徹底を図るんですけども、自分が好きなことしかしないので、ほとんど上手くいかない状態でした。それから小委員会とい

って、いろんな外部機関の方に集まってもらって、対応の検討をしました。教育委員会の方や、サポートセンター、児童相談所、発達障がい者支援センター等が参加をして、生徒の対応を話し合いました。しかし、そこで考えた対策も残念ながらうまくいかなかったです。それから校区の不適応対策委員会といって、成育歴、幼稚園の先生がいるので成育歴を知ってる先生、そう学校の担任を集めてですね、不適応対策委員会で情報収集、対策を考えるということをしました。その話の中でこれまでとは方向を変えようかなと話になりました。児童自立支援施設への入所どうかと、一度相談所への相談もして、一時保護を狙いました。実際児童相談所の連携ということで、児童相談所にことあるごとに出向いて、とにかく情報を入れて、今こんな状態で、こんな指導をしていますとか、おうちの情報はこうですとか、入れておきました。一番いいタイミングで一時保護に持っていこうと。でその場面がいよいよ来ました。おうちの人に来てもらって、そのまま児童相談所への相談を持ち掛けて、一時保護をしてもらいました。で、一時保護をしてもらったんですけども、うまくいきませんでした。もう一つの作戦として児童自立支援施設への入所というのもありました。支援会議というのに参加をさせてもらったんですけども、これも本人の同意がないと行けないというので、これも断念せざるを得ない状態になりました。

東部少年サポートセンターというのがあります。子ども達の自立を支援し、親の子育ての不安、悩み解消を支援する。少年や保護者などから、非行問題交友問題学校問題など、悩みや困りごとについての相談を受ける機関です。ここは女性の職員さんがおられるんですけど、次にそのサポートセンターとの連携を考え始めました。これも一緒にどこにかく何かあるたびに、情報を入れてアドバイスをもらうということをしてました。問題行動があった場合はその情報を入れて相談をするなど。2年生の時に A を連れて毎週サポートセンターに行きました。面接の個室があるんですけども堅苦しいのでそこを使わず、そこで「どうしたあ？」みたいな、他愛のない話をし、「何が好きなの、なんだいな」みたいな話から、なんか作ろうかみたいなことになって、たこ焼き作ったりとかしながら、とにかく、指導するっていうんじゃなくて、話を聞いてあげるみたいな。そういうような関係をつくった頃に、家庭状況の変化があった。そして、学校でもおちついて生活をするようになりました。最後は頑張って運動会にも出て、卒業して就職をしました。関係機関はたくさんあっていろんな相談をできるんですけど、実際僕の感覚として、上手くいくことはやっぱり少ないです。結局この場合でいうと A 自体が、もう「顔」で生きてますので、なめられたらいいけん、とか、心を開いたら負けだとか、という感覚があるので、ほんとにいい関係を作らないと、話も落ちていかないと、ということが実際のところなんです。

成果と課題になるかも分からないですけども、まず、やっぱり関係機関と連携をとる前に、教師と生徒がどれだけ繋がるかということがすごい大事です。なんかあったら、みんなの前で「こら」って言われてそいつが「ごめんなさい」っ

て言えないんです。「顔」で生きてるから。その場面は向かってくるしかないんです。もしくは何か物にあたって、その場から逃げていく。何かなめられないようにするしかないんです。問題行動をおこす生徒は。誰が繋がれるかということが非常に大事です。それから、あらゆる専門機関に相談することによって、沢山のアドバイスがもらえた。で、その中で何を選択するか、何が一番効果的になるか、選ぶことが出来ると。それから最後なんですけども、各機関ができることできないことをよく理解したうえで、いかに巻き込んでいくか。僕生徒指導主事なんですけども、管理職といかにストーリーを立てて、この生徒を導いてやるかということ、考えなければだめなのかなと思っています。

最後です。折角の機会なので、見てもらおうと書きました。問題行動をおこす生徒に対応できる教師はごくわずかです。どうでしょうみなさん、目の前で荒れ狂ってるやつが目の前にいたら。自分しかいないから、自分で対応するしかないです。なかには、校舎の中をガム噛んで歩くとか、茶髪にして学校に来るとか、ほんとにすれ違うだけの教員もいます。でその後で、生徒指導、とか学年主任とか、体育の怖い先生とかの所に行くと、先生あの子はこうでした、って言う教員も沢山います。よく、教育実習にくる実習生に、荒れている生徒と私とは、人生が違うという話をします。僕も君たちも人生が違います。それから、問題行動をおこして、彼のような子もそうなんですけど、自分の力でどうにもどうにもならない人生を抱えている子と我々は話をしなければいけないんです。よく勉強して、いい高校入って、大学生になって、賢いから教員試験受かって何にも挫折をしていないというか、そういう子が教員になる事が多いんだという話をします。生徒は、そういう教員はすぐ見抜くって言います。生徒はほんとに一瞬で教員を見抜きます。だからこいつには負けたくないとか、こいつはちょっとマズいとかという一瞬の判断を顔見た瞬間にします。なので、腹をくくって教員になってほしいと思います。

最後に、問題行動をおこす生徒を、あなたはかわいがってあげることが出来ますかと、いうことで閉めたいと思います。どうも有難うございました。

（会場）拍手

※一部実際の事例を含むため、省略及び改変をしております。

（3）パネリスト講演：

國富一郎 鳥取市教育委員会学校教育課
スクールソーシャルワーカー

（國富）最後になりました、改めてこんにちは。

（会場）こんにちは

（國富）先ほど、小谷先生から、さっきの坂口先生の話で、

サポートセンターというのが学生さんはわからんでないかということで、説明していってこれということでまず説明します。

鳥取県の県警の方がですね、少年のいろんな問題に對しましてですね、主に少年行動、あるいは少年問題に対する悩みの相談をできるところを、ずいぶん前に県庁の近くに作って、いろんな問題をそこに相談に行けるようにと形になりました。鳥取県警の相談機関だと思います。

私、鳥取市のソーシャルワーカーになりまして6年目になります。SSWの話をしようと思ったんですけど、最初浪花先生の方がほとんど話をされたので、私はしゃべることはないなあと思っております。ただ、実際どんな活動してるかということを紹介していこうと思っております。資料を見てください。毎日新聞の若い記者だったんですけども、2年前にうちのところに來まして、ちょっと取材させてください、ということで書かれたものです。割とSSWのことがコンパクトに書かれていますから、よくわかると思います。このもう一人写とる方が、私の相方でこの2名ですね、平成23年から4年間、鳥取市内の小中学校61校ありますけども、2人でずっとこの学校を回っておりました。私は元教員ですけども、この相方は福祉関係のベテランで、先ほど坂口先生も話しておられた児童相談所ですね。この児童相談所の課長なんかも務められた方です。SSWの定義も、言おうかなと思ったんですけども、省略します。要するに関係機関とのコーディネーターということです。実は4年間2名でやっただけですけども、少しずつですねSSW、先ほど手を上げていただいて、結構な方が認知されておるんですけども、今から4~5年前は、ほとんど、「え？SSWってなんですか」という状態でした。なる前は私もそうだったんですけども。結構認知が進んだんだなと思っております。それですね2名の体制が、毎年予算が拡充されてきて、2名が3名、3名が4名というふうになっておりまして、現在鳥取市は5名のSSWがおります。この予算が拡充された大きな経緯というのがですね、私の知る限り、今から2年か3年前にですね川崎市で上村遼太君の事件、皆さんご存知だと思いますが、冬に真っ裸にされて泳がされて、ナイフで殺害されたという非常に悲惨な事件なんです。あの背景にいったい何があったのか、あの子は不登校だったんですね。で、母子家庭で、隠岐の島から川崎に移ったんですけども、あの子の背景として、お母さんは夜どうしても仕事をしに出ないといけない状況がある。だから夜上村君は、外に出て時間を過ごすことしかできない。結局いろいろ調べてみたら、一番根底に貧困という問題があったんですね。その貧困という問題に對して、当時川崎市はSSWを導入しとったんです。ところがそれにうまく、行政も、学校も、うまく支援が及ばなかったという反省の元にですね、文科省がこれじゃいけない、制度をつくった。実際動けないようなSSWの制度作っちゃダメだということで、SSWの予算を少しずつ、少しずつ拡充していった。私が聞いた話では、全部の学校にSSWを配置するんだ、という国会議員さんもおられるって聞くんです。ただ先ほどの浪花先生の話ですけども、社会福祉士とか精

神保健福祉士とか、なかなか取れませんかそんなに多くはないんです。ですから、今、浪花先生が一所懸命SSWの養成講座というものを、鳥取県が3年くらいになりますかね、されて、大阪から大学の先生を招いてされております。結構20名30名受講生がおりますので、もし皆さんが希望されれば、また来年から受講されてみてはいかがでしょう。実際私教員OBですけども、やっぱりきちんとした資格を持っておられる方の、指摘される、つっこみかたと、私は全然違うなと思います。

鳥取市の5名の内訳ですけど、福祉畑が2名、資格を持っておられます。警察官OBが1名。それから少年サポートセンターを立ち上げられました、婦人少年相談員のOG女性の方が1名、私の1名の5名。5名体制で今やっております。SSW大きく分けて、二つの形があります。まず一つは学校配置型といって、学校に配置して、実際に学校の要請を受けて、家庭訪問とか、子どもとの色んな話とかですね、そういうのになっている、学校配置型。それから私のように教育委員会に籍を置いて、それぞれ、学校のニーズにおいて、あるいは学校から来てくれと、要請があつて出かける、派遣型と、大きく二つあります。鳥取市は言ったように後者の派遣型なんです。先ほど話にありました県立学校ですね。特別支援学校とか、県立高校なんかには、学校設置型で、学校にSSWがおられます。ずいぶん拡充しまして、私が6年前になった時には県下でも20名くらいだったと思うんですけど、今はもう36、7名ぐらいに非常に拡充して、SSWが活躍をされております。

SSWの話をしようかなと思ったんですけども、浪花先生がほとんどされましたから、その説明は抜きましてですね。ちょっとせっかくな機会ですから、この機会をいただきましてですね、この大学で40数年前に学んだ皆さんの先輩の一人として、私の思いを聞いていただけたらなと思います。今この教室はですね、実は私がおった頃は、この棟が、教養学部棟と言ってですね、当時は教養学部というのが全国的にあったです。教養学部で2年間学んで、あと2年間は専門学部、農学部だったら農学部、工学部は工学部とかね。とにかく大学生にも教養が必要だということで、全国的に教養学部というのがもてはやされてですね、2年間は教養を学んだんです。でこの教室が一番大きくてですね。法学とか、社会学とか、倫理学とかを学びました。私はバスケットしとって5時になると体育館に必ずいるんですけども、それまではいい加減なことをしとったのは、ごつて反省しとります。この教室で学んだんですけども、たいてい一番後ろの席で、ひどい話なんですけども、先生の話聞いてなかったなあと。今日座っておられる方はそうではないと思ってるんですけども。だいたい後ろの席が私の定位置だったです。そんな話をちょっとさせて頂いて、実はこの鳥取大学は教養学部も無くなったんですけども、教育学部も今から少し前に無くなりました。鳥大から教育学部がなくなるということ、県で教員養成の学部がなくなるというのは、私ずっと県内の小中養護学校に38年間務めてきた身としては、非常に寂しいというか、心配しております。小谷先生から声

かけていただいて、「教員養成センターがこういうふうな講座を開いておるので来てくれんか」と言われた時に、実は私、こういう教員養成センターがあるというのはね、知りませんでした、申し訳ないです。「小谷先生、ここはどういうふうな学生さんが来られるんですか」と言ったら、「農学部、工学部、地域学部、色んな学生さんが、免許を取りに来られるんだ」と。「将来先生になられる方なんですか？」って言ったら「そうです」って言って。私その時にですね、ちょっと希望の光が見えたような気がします。鳥取県だけなんです。県で教員養成学部がないのは、全国 47 都道府県で。その中で、この教員養成センターが鳥取県にあるというこれが私たちの希望の星だなと、思っております。この中で県外出身の学生さんも沢山おられることと思いますけども、是非ともですね、鳥取県の教員を目指して頂きましてですね、鳥取県の子ども達の教育を皆さん方で担っていただいたら非常にありがたいなと、私個人的に非常に思っております。ただ私だけじゃなしに、いろんな同僚の話を聞くと、多くの教育関係者や鳥取県民も望んでおりますので、皆さん是非とも鳥取県の教員を目指して頂けたら、非常にありがたいなと思っております。

SSW とは関係ない話をさせていただいて、申し訳ありません。市の教育長と私同級生なんですけども、これは私の私見ですので、教育長が言えと言われたからでは無いので、言っておきます。

さて、中身に入りますと、スクールカウンセラーはよく知っておられると思いますけども、この SSW はアメリカなんかではずいぶん以前から導入された制度です。一言でいえばコーディネート役なんですけども、このプリントの裏を見て頂ければですね、鳥取県にはこういう専門機関があって、学校にもですねスクールカウンセラー、心のボランティア、専任指導相談員とか、学校周りにもいろいろ相談する機関があります。これをどういうふうにコーディネートしていくか。これが SSW なので、この図が良く SSW を説明した図としてよくわかるんじゃないかと思います。これを参考にしていればなと思います。学校だけでは解決できない、色々な問題があります。私今市教委の学校教育課の生徒指導係というところにおるんですけども、生徒指導が 3 名と我々 SSW の 5 名の 8 名体制でおるんです。毎日じゃんけん電話が鳴ってきます。生徒指導に関わる電話とか、不登校に関わる問題とか、お母さんが非常にクレーマーになっとって学校にガンガン言ってくるとかですね。結構よくあるんですよ。それから、虐待もありますですね。これは虐待として児相に通告した方がいいでしょうか、とかですね。一日に何本でしょうね 10 本ちょっとでしょうね、もっとよくありますね電話かかってくるのは。そういうところにおるんですけども、ただ、対応だけでは、いちごっこといえますか、モグラたたきになりますから、我々 SSW はできるだけ学校に、ちょっと心配だなと出かけようと、早期に出かけようということをしとります。出かけることを、アウトリーチと言います。専門用語ですけども。アウトリーチを専門的にやろうと。学校の心配事があつたら出かけて、早期対

応、あるいは早期に発見するように心がけています。たくさん専門機関あるんですけどもね、実は私もそうだったんですけど、学校の先生方はこういう専門機関をあまり知りません。知ってつても、児相か教育委員会か、それからサポートセンターを知っとられたら良いくらいで、後は、子ども発達支援センターとか、希望館にも家庭支援センターというのがある。ちなみに希望館って知っておられる方手を挙げてみてください。知られませんね。希望館というのは、鳥取こども学園、養護施設がありますね。親が養育するのが難しいという様子を引き取るんですけども、その鳥取こども学園の中に、希望館って言って、障がい児の短期治療施設があります。発達障がいとか情緒障がいの子ども達が、そこでいろいろな支援を受ける、そういう施設があります。ここには、東中の分校やら、修立小学校の分教室があります。そこにも子ども家庭支援センターというのがあって、セラピストや、専門のスクールカウンセラーがおって、いろんな相談に乗ってくれます。でこういうのをですね、実は学校の先生方あまり知りません。私もかつてそうだったんですけども、やっぱり、もっと早めこういうことを知っておけばよかったなということを、今から残念に思っております。

活動具体例を紹介しておきます。一つの例としてですね、小学校に入るときにその子どもに就学通知書というのが教育委員会から行くんです。本人の名前と下に保護者名があるんですけども、両親が亡くなったり、失踪したりしていて、保護者名が無くてですね、本人の名前しかなくて入ってきた子がいます。学校はですね指導要録をつくらねばいけません。指導要録というのは、子どもの基本台帳のみたいなもので、学校でいうと、それに子どもの名前は書かずに保護者名を書くんですけど、ここは保護者が空欄で 2 年経っているということがありました。3 年生になっているのに、保護者が確定しない。校長先生が変わられるとですね、SOS が来たんです。どうしたらいいんでしょうかと。この子は保護者をどうしたらいいんでしょうと。で専門機関をずっと調べたんですけど、どうにも専門機関につながる場というのがないので、これは仕方ないということで SSW が動きました。結果的にはおばあちゃんがおりましたので、おばあちゃんを未成年後見人として、家庭裁判所の方にその担当地区の民政員さんと一緒に行って、家庭裁判所の調査官にこうですよ、こうですよと言って、未成年後見人に認めてもらいました。その時に、家庭裁判所の調査官がですね、今はよく社会認知出来とりますけども、その当時ですね、あなたは誰ですかと言われ、SSW です、と言った時に、なんだいなそれはと言ってですね。ずいぶんこの SSW を家裁の調査官に説明するのを、苦勞したのを覚えております。

（事例 2 省略）

最後にですね、子ども達にとって、やっぱり学校ちゅうのはね、最後の砦なんです。子どもや保護者にとって、最後の専門機関は学校だということを皆さんも知っておいてください。以上です、終わります。

(会場) 拍手

(4) 補足および会場からの質問とパネリストの回答

(石本) ありがとうございます。本当にこんなに充実した話を3人聞けるというのは皆さんすごくラッキーだと思います。就職前に聞いて良かったんじゃないでしょうか。で、今話にもありましたように、学校って、貧困の問題だったりとか、複雑な家庭の問題だったりとか、そういう問題が全部出てくるんですよ。本当にいろいろ対応しないといけないので、まあ皆さん今日話を聞いて、「ちょっと自信がないな」と思った人も沢山いるんじゃないかなというふうに思います。もう自信がないなと思った人に対して、「それでも頑張って教員になってください」というふうには僕は言わないスタンスなので、まあ自由に他の進路を目指していただいてもそれは全然かまわないんですけど、それでももし「教員になろう」って思う人は、坂口先生の話でも“人生が違う”ってありましたけど、自信がないのは当然なんですし、「やばい」と思った人は、できるだけ今のうちにいろんな経験を積むといいかなというふうに思います。別にね、今から夜間徘徊をしろって言うわけじゃないですよ。そんな経験を別に積まなくてもいいんですけど、でもいろんな現場に行ってみるとかいろんな人の話を聞いてみるとか、まあボランティアでもいいですし、別にバイトでもいいんですけど、いろんなところに行っただけ経験を積んでおくっていうことはやっぱりその違いになってくるんじゃないかなというふうに思いますね。じゃあ、時間がまだ少し残っていますので、皆さんから質問があればその質問を聞きたいなと思うんですけども、どうでしょう。せっかくの機会なので。

(質問者1) 皆さんすごい貴重なお話をくださり、どうもありがとうございます。あの浪花先生にひとつ質問があるんですけど、僕の友人です、ひとつ上の学年なんですけれど、いじめの問題がありまして、その友人が間違っていじめの犯人というふうに疑われてしまいまして、本当にいじめをおこなった人は別にいたんですけど、それが後々わかって、でも、その僕の友人が学校に来なくなっちゃったということがあったんです。それでなんですけれど、そのいじめの認知を上げるという話があったんですけど、いじめの認知を上げることによってそういう、誤ったいじめの認知が起こってしまう可能性が危惧されるのではないかなと思うんですけど、その点についてご説明何かございましたら、お願いします。

(浪花) はい、貴重なご質問ありがとうございます。今の学校現場からでも、教育委員会はいじめを認知しなさいというんだけど、そんな認知をたくさんしていいことはあるのか、っていう質問を受けたりもしますが、やはりいじ

めを認知する数が少ないと、教員の対応力っていうのもそんなにについていけないと思うんです。さきほどの坂口先生のように、いろんな修羅場を潜り抜けてこられた先生が学校に必ずいてくだされば、これはもっともっと深いところまで調べていかないといけないんじゃないかっていうことに気づかれるかもしれませんけども、経験が少ない先生も多いですし、そうすると、まあ間違った判断になる場合っていうのもあるかもしれません。だから、教員の対応力をつけるためにも、さきほどもね、石本さんもたくさん経験を積むっていうことも言われましたけども、いろいろなケースに対応していくってことが、そういった、間違いを見抜くことにもつながるのではないかなと思います。その後、ちゃんと見つかって、正しく対応されたら良かったと思うし、その子が学校にまた復帰できればとは思いますが、やっぱりそういった思いを抱かれると、認知しなければいいのっていうことになってしまうと心配なんです。我々としては、どんどん早期的に発見して対応していくってことを求めているんです。ありがとうございます。

(質問者1) はい、ご回答ありがとうございます。

(石本) 他に何か質問ございますか。

(質問者2) 貴重なお話をありがとうございます。坂口先生に質問なんですけども、僕も中学校の時は、僕が学校に入る4、5年前には、廊下をバイクが走ってたっていうくらいの中学校を出てきた身なんですけども、学級っていう、ある種閉鎖空間の中で、先生になる人っていうのはみんな責任感が強くて、他の人に助けなんか求められなくていう人が多いと思うんですけども、でその、先生が助けを求められる、周りの関係機関に助けを求められる、というか、相談をできる空気感っていうのはあるかっていうのをききたいのと、あと浪花先生にもききたいんですけども、先生方がそうやって相談をしやすいようにできている仕組みっていうのは今あるんでしょうか。お願いします。

(坂口) えーっと、まず生徒指導主事の仕事として、僕は校内のコーディネーターもするんですけども、校外の専門機関との窓口になってます。なので、こういう事例で困ってるっていう事例があった場合に、僕に相談が入ってきます。で、管理職に相談して、僕が「これにつないだ方がいいと思うんですけど」というような提案をして、それでつないでいくパターンが一番多いです。ただ、本当に、さっきもいわれたんですけども、この学校支援ネットワークの機関を知ってもらえる先生はほとんどいないのが現状です。

(浪花) はい、校内の相談の体制ということですね。やはり担任との関係性が一番基本にはなるんですけども、やはり担任に話せないとか、それから中学生くらいになると、自分がいじめを受けているってことを隠そうとすることも

できます。なかなか家でも言わないし、学校でも相談はしないと。そうなるときには、担任以外の教員の目、教科担任であつたりとか、それから養護教員であつたりとか教育相談の担当者だとか、それから、子どもとちょっと歳の近い若い先生にね、子どもが気安くこう、話しかけてくれるような先生からの情報っていうのが集まるような組織を学校が作っておくことが、まあ、ほとんどの学校がそうになっているんですけども、いじめが見つけれられない学校っていうのはやっぱり担任が丸抱えしてるとか、忙しさの中で、もう相談する間もないような状況になってしまっている場合があるので、それをなんとか防ぐために、コーディネートできる先生をとにかく学校の中から、しっかり育てていくっていうことを今、お願いしているところです。あとは、アンケートを、とにかく、年間に1回って学校もまだあるんですけども、学校によっては、2週間に1回くらい、今どうですかとか、何か困っていることないですか、っていうような2分のできるようなアンケートを繰り返してられて、本当に子ども達の気持ちに寄り添っておられる、っていうような学校も出てきています。もちろん、名前を書くアンケートではなかなか見つけられないので、無記名のアンケートをとられるとか、そういったような工夫もなされて、そういった学校はいじめの認知も本当に進んでいて、積極的に対応されている、という情報をお伝えしたいと思います。

（質問者2）ありがとうございました。

（石本）まあ、教員同士が相談できる空気感かどうかっていうのはね、実際問題、学校による、と思います。本当に管理職だったり、教育相談の先生のね、力によるところがあると思うんでね、今言ってもらったみたいに、責任感っていうのが、他に相談せずにひとりで頑張る責任感じゃなくって、相談をすぐにするっていうふうな責任感の方を持ってもら学校でないとちょっと困りますよね、本当はね。じゃあ、まああと1、2分あるのであと他にも質問がある方いたら。どうでしょう。

（質問者3）今日はお話ありがとうございました。私は、来年から小学校の先生になるんですけど、だからえっと、坂口先生のお話がすごい印象に残っています。そのAくんの荒れた様子を見せてもらった時に、私がもしAくんの担任やったらって思ったら、いや正直やばい、って私が死んじやいそうって思いました。で、その、「教室に入りなさ

い」とか、なんか自分絶対言うやろうなって思って、でもそのただ教室に入ることが正しいみたいなの正しさって、あの、私が22年間生きてきた中でたまたま獲得してきた正しさであって、そのAくんにとっては、その悪い子たちとつるむことでしか、自分を守ることができなかった、のが、その子にとってはそれが正しさで、坂口先生もいろんな人生があるって言われてたんですけど、なんか教師って、自分の正しさを押し付けてしまう可能性がある職業やなって思ってて、じゃあ私はどうしたらいいのかなあって、思ったんです。それが質問です。

（坂口）えー、人間力高めましょ。まず、自分自身の。それが一番じゃないかな、と思います。で、やんちゃな子に対しては、段階があるっていうか、1年生の頃はきちっとしてて、だんだん荒れていくようなスタイルの人もいれば、転勤して、いきなり荒れているっていう、こともあったりして、いろんなパターンに対応するんですが、全体で、まだ抑えられるときは、ガンガン全体指導で抑えます。教室に入るみんなが入る。ただ、その本当にあぶれてくると、もう個別対応で話をします。で、「高校に入ろう」なんて僕が言うか。ほとんど言わないです。多くの先生は、高校に入れん、こんなことしとったら高校に入れんだろって言われるんですけど、高校生になるだけが人生じゃないし、いろんな仕事があるという話はしてやる。ただ、お前は将来、誰かに使われる人生なんか、そうじゃない、誰かを使いたい人生なのか、どちらを選ぶかによって、また生き方が変わるとか。親元で生活するよりも、家を出た方がいいと。中学生の段階ですよ。だけど、そういう話、将来的にそういう人生もあるぞという話もしたりします。あとはまあ、僕らはもう種を植えるのが仕事なので、植えたらすぐ生えてこない。何年後に、ああこいつこんなこと言いよったなっていうのがどっかに頭にあって、まあ人生が変わってくれたらいいかなっていう感覚でいます。頑張ってください。

（質問者3）ありがとうございました。

（石本）はい。もしかしたらまだ質問したい方がいるかもしれないと思いますが、時間になりましたのでここで終わりにしたいと思います。じゃあ最後にもう1回3人の先生方に拍手して終わりにしたいと思います。ありがとうございました。